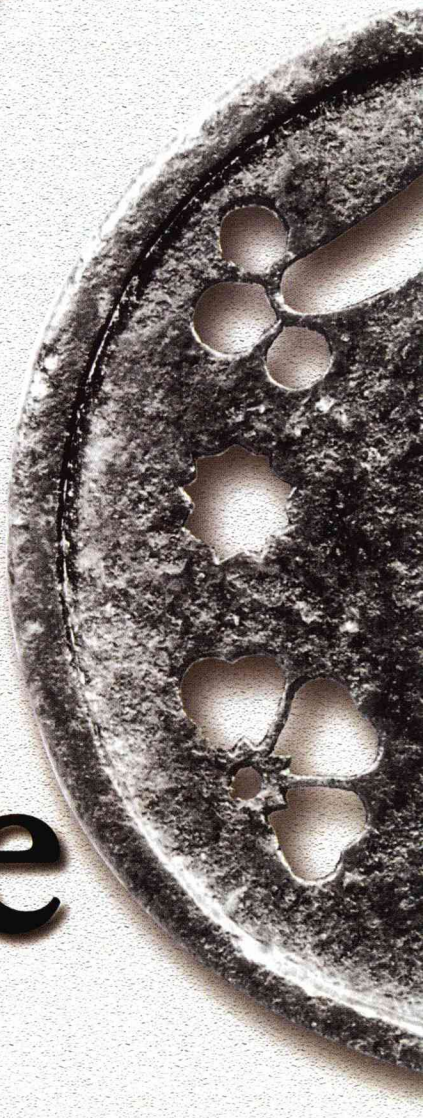
鉄無文鐔
無銘　古刀匠　室町時代

菊図透鉄鐔
無銘　古萩　桃山時代



Steel Landscape 鉄の点景

世界に比類なき美術工芸品として認められる日本刀。
実はその一部である鐔だけを愛し、
専門に収集するコレクターが数多く存在する。
鐔という小さな鉄片の中にひそむ、人々を惹きつける魅力とはなにか。
日本の伝統の美の中で息づく鉄に迫る。

14

鉄が主役の迫力ある「絶景」をとらえようと試みてきたこのシリーズ、この号から少し視点を変えて、私たちの暮らしや文化の中の「点景」としての鉄のさまざまな表情を探っていくことにする。

張果老図透真鍮鐔
銘　安親　江戸時代中期

桜丁子雪華透鉄鐔
無銘　古甲冑師　室町時代

日本の美しい鉄—鐔（つば）

鍛えあげられた鉄に浮かび上がる風雅—古鐔（こたん）の魅力

現在、美術店や骨董店であつかわれる鐔は、江戸時代以降の物が多いが、鐔の本当の魅力は古鐔にこそあると愛好家はいう。

古鐔とは、おもに室町時代から桃山時代にかけてつくられたものをさし、刀匠や甲冑師をはじめ、尾張、金山、京透、古正阿弥、古萩などの流派があり、もっとも時代が古い古刀匠や古甲冑師の鐔は大振り薄手の鉄製で、戦乱の世にあってまさに実践の場で白刃を受け止めるのにふさわしい剛毅なつくりのものが多い。

古鐔の魅力は「鉄味（てみ）」にあるといわれる。そもそも鐔は、研磨して光輝く状態にする刀身とは異なり、鍛えあげた鉄に黒錆をつけて仕上げるものである。日本刀と同じように折り返し鍛錬をして錆付けをし、腐食につながる赤錆から鐔を保護する。いわば「錆をもって錆を制する」わけで、不動態被膜を形成することで腐食を防ぐ現代のステンレス鋼などと同じ発想である。当時の工匠たちが、こうした自然科学の原理を知っていたかどうかは明らかではないが、彼らはどうすればよい黒錆が得られるのかを研究して試行錯誤を重ねた。伝えられるところによれば、鼠のふんを塗り付けてみたり、鮎のはらわたを使ってみたりと涙ぐましいまでの努力をしていたようだ。

こうして完成した鐔は、紫や青味を含んだ独特の黒色を顕わし、表面には、幾度となくたたきこみ鍛えた槌のあとが残っている。そのざらついた槌目、錆のつき具合、時代時代によってかわる鉄の色味などがあいまって、たまらない味わいを醸し出すのだと愛好家はいう。備前焼きや信楽焼きなどの素朴で深みのある土物にも似た枯淡な趣は、わび・さびの世界に通じるものがある。

金梨子地菊紋金装糸巻太刀拵
江戸時代初期（後水尾天皇御料）

もうひとつの古鐔の魅力は、その狭い空間に描き出される宇宙である。およそ装飾性というものを排したその表面には、桜や梅などの自然の風物や、素朴な信仰を表したと思われる抽象的な図案が透かし彫りされている。卒塔婆を背景に、空風火水地の5文字と南無阿弥陀仏という念仏を刻んだものもある。

鉄鐔の横綱と呼ばれる室町末期から桃山時代にかけての鐔工、尾張の信家は「斬り結ぶ　太刀の下こそ地獄なれ　ひと足ふみこめ　そこは極楽」と道歌を毛彫りで表した。明日をも知れぬ戦乱の世に身をさらしていた当時の武士たちの覚悟とか剣の極意が見てとれる。

わび・さびの古鐔美から華やかな金工鐔の美へ

室町後期から桃山にかけて、専門の鐔工が現れた。これにより鐔の世界は、その図柄、素材、形ともに大きく変わっていく。それは刀装の一部を担っていた鐔が、独立して箱に入れられ、鑑賞されるようになっていったことを意味する。茶道にあって、掌の上で茶碗を鑑賞するようにである。桃山時代には信長の安土城に代表される華やかで自由闊達な時代の空気を反映して、鐔はさまざまな意匠を凝らした美術工芸品として本格的な鑑賞の対象となっていく。もっとも素朴な板鐔や透鐔に加え、高肉彫、象嵌（ぞうがん）、色絵といった彫金の技術を駆使した、より絵画的、より彫刻的な美が展開されていったのである。

さらに下って江戸時代も元禄頃になると、天下太平の世になり、紀国屋文左衛門のように強固な経済基盤をもつ町衆が出現してくる。豪商、豪農と呼ばれた者たちは武士の表道具である刀を保護装飾する鐔などの刀装具に財をつぎ込み、名品を手に入れようと競い合うようになる。この風潮が鐔の世界においては、より装飾的な、より華美な傾向を促し、鉄鐔のほかに、金・銀・真鍮・四分一といった色金鐔が作られるようになった。これらを総称して金工鐔と呼ぶ。

鐔好きの中には鉄鐔派、金工派と、それぞれ贔屓がいるが、両派のよいところを認めて鉄も金工もともに好きだという向きも少なくない。埋忠明寿、土屋安親、後藤一乗、加納夏雄といった巨匠たちも、両方に名品を残している。しかし数的には古鐔の名作は少なく、愛好家にとっては鉄錆の美しい雅味のある名鐔を探すのは並大抵のことではないようである。古鐔を愛でるのは古き時代のよさを認め、時代の味を鑑賞することにもつながる。

＊

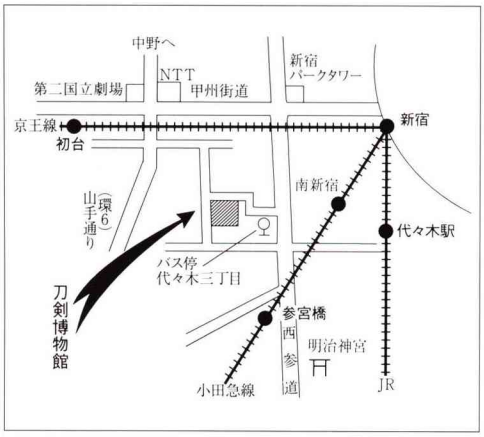
「鉄味」という鉄そのものの素朴で力強い美を見出だそうとする古鐔の世界は、虚飾をふり捨てて、真の美を見出だそうとするこれからの新しい時代の日本人の心を象徴しうるものかもしれない。また、鉄そのものの中にそれほどの美がひそんでいるのだとする古鐔愛好家たちの視点には、鉄に携わる者として何かしら学ぶべきものがありそうだ。

［取材写真協力：財団法人　日本美術刀剣保存協会　刀剣博物館］

刀剣博物館

世界唯一の日本刀専門博物館。通常展示では平安から江戸にかけての名刀と鐔・刀装具・刀装を展示。新春名刀展（1～3月）は国宝重文を多数陳列、6月は現代刀匠と鐔製作者のコンクール展、12月は現代研師白鞘・拵・柄巻・白金師のコンクール展を開催する。（財）日本美術刀剣保存協会は日本刀の原料である玉鋼を確保するために伝統的な「たたら製鉄」を現代に復活させたが、同館前にはその製造物である2.5トンもの「鈩」（鉄塊／右下写真）が展示されている。

年末年始と毎月曜日を除き、常時陳列・開館。



渋谷区代々木4-25-10
TEL　03-3379-1386
小田急線参宮橋より徒歩7分。